

風呂の残り湯を使用した洗濯実態変化について

○東海林建三、長谷川伸子(花王生活文化研究所)

【目的】風呂水コース(風呂水給水用内蔵ポンプ)が主要各社の洗濯機に揃って搭載され始めた1995年以降、その搭載率は年々増加している。このような洗濯機の変化と生活者の節水意識の高まりとが相まって風呂の残り湯の使用に関わる洗濯行動が大きく変化しているものと予測できる。そこで、現在の洗濯への風呂水使用実態を把握すると共に、生活者が風呂の残り湯を使用することによって生じるメリットとデメリットについて考察した。

【方法】首都圏在住の主婦(N=129, 20~60代の専業、有職主婦)を対象に自記入式アンケート調査、一部対象者への訪問調査及び洗濯回収衣料の解析を実施した。

【結果】洗濯に風呂の残り湯を使用している人は57%、水道水だけの人では39%であり、半数以上の人々が洗濯水として風呂の残り湯を使用していた。これは、日本石鹼洗剤工業会の洗濯実態調査の結果¹⁾からも示唆されるように洗濯機の変化が影響しているものと考えた。特に顕著な変化として、風呂水内蔵ポンプが搭載されている洗濯機を所持している人とそうでない人では、風呂の残り湯の使用行動が異なっていた。前者は洗濯工程の“洗い水”としての使用に止まらず、“すすぎ水”として使用している人が多く、後者では“洗い水”としての使用に止まっている人が多かった。

また、生活者から直接話を伺う訪問調査及び生活者宅で洗濯を行って頂いた衣料を解析した結果、風呂の残り湯を使用して洗濯した衣料からは、乾燥条件によっては水道水だけの場合とは異なる“臭い”が発生する場合があった。

1) 鈴木; 第32回洗淨シンポジウム要旨集, p111 (2000)